禅文化歴史博物館セミナー講演録

家康を支えた一門・松平家忠とその時代～『家忠日記』と本光寺～

久保田　昌希

はじめに

駒澤大学文学部歴史学科の久保田昌希と申します。私は本学に勤めて三〇年になります。今年度で退職ですが、大学院のゼミで久しく、テキストとして『家忠日記』を読んでいました。臨川書店から出版されております『増補続史料大成　家忠日記』を、ゼミ生たちと回し読みをします。担当者が逐条解釈をして、そこに出てくる人物・事項名・社会情勢、家康の様子はもちろん信長・秀吉をめぐる問題などを、十数年の間読み込んでまいりました。その間に駒澤大学図書館に『家忠日記』の原本を深溝松平家から御寄贈いただいたということがありまして、本当に私も嬉しくて、ますますゼミ生諸君とも熱が入って、励んでやってまいりました。

今回は禅文化歴史博物館で、企画展「松平家忠とその時代―『家忠日記』と本光寺」を開催していまして、深溝本光寺、島原本光寺、肥前島原松平文庫のご協力、愛知県幸田町教育委員会、長崎県島原市教育委員会、世田谷区教育委員会の後援をいただきながら、非常に良い展示ができていると思います。貴重な史資料をお借りすることができ、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

今日は「松平家忠とその時代」ということでお話しさせていただきますけれども、展示図録もまた良いものができたと思っております。御来館いただいた方にはアンケートを書いていただければ差し上げることができますので、お帰りになりましたら、是非周りの方にもお薦めいただき、この図録を手にしていただいて、『家忠日記』の存在を広く知らしめていただきたいと思います。この時代に興味を持っていらっしゃる方は『家忠日記』を知っている方も多いのですが、一般の方にはなかなか知られていないところもありますので、これを機に多くの方々に『家忠日記』の史料としての価値を知っていただきたいと思っております。

図録の方には、「『家忠日記』と深溝松平氏」として寄稿させていただいております。この内容も含めてお話をさせていただきたいと思います。

（付記）令和二年三月一九日、文化庁文化審議会文化財分科会は、駒澤大学図書館所蔵『松平家忠日記』を国の重要文化財に指定するよう答申し、九月三〇日に指定・告示（官報号外二〇三号）された。

一、『家忠日記』について

『家忠日記』は松平家忠の自筆の日記で、天正五（一五七七）年一〇月から文禄三（一五九四）年までの約一八年間の記事で構成されています。ただいつから書き始めたということは、日記冒頭部分の破損が激しくてわからないのです。しかし最近、一巻冒頭にわずかに見えている文字が、永禄の「永」の一部、「禄」の旁の部分と読めるのではないか、という研究がありまして、「永禄」ではないだろうか。そして、家忠が一四歳、元服してから書き始めたとすれば、「永禄十一」と読めるのではないかという説があります。これも今までの『家忠日記』の管理状況や伝来形態からすると、果たして一巻冒頭部分が、『家忠日記』の書き始めなのかという

問題があります。永禄の可能性もあるだろうけれども、記事が残存している天正五（一五七七）年一〇月からとしておきます（天正元年七月説もある）。

そして七巻の最後の方が文禄三年となっていますので、残存状態から一八年間としておきます。おそらく慶長五（一六〇〇）年までは日記を書いていたのではないかと思いますが、この年の八月一日に家忠は伏見城の籠城で戦死しますから、日記を書いていたとすると、あるところまで書いておいて、領地の小見川（千葉県香取市）を出てきたかもしれないなど考えられますが、いずれにしろ天正五年から文禄三年の間の日記が残っています。

年や月ごとに日記の料紙を改めずに日を追って書き継いでいます。料紙一丁の表裏に大かた六日から九日程度の日数分量が記載されています。ただし必ずしも日数に固執せず、月日、干支、天候、特に雨・雪などの悪天候などについては、家忠は非常にきちんと書いてあります。地震や洪水などの自然災害もあります。当然家忠のもとには情報がもたらされていたと思いますが、いわゆる又聞きというよりは、むしろ自分で関心事や情報を選びながら記述してゆくという内容なのであろうと思います。また誰かが描いたと思われる様々な絵がたくさんありまして、これも『家忠日記』の特徴です。

記事自体が簡素で、公家の日記によくみられるように長々と書くのではなく、短く簡潔に書いている部分が非常に多い点など、家忠の性格が垣間見えるのではないかと思います。

『家忠日記』の原本は今は七冊ありますが、もともとは一冊であった可能性があります。日記が収められている桐箱には、昭和四〇（一九六五）年東京大学史料編纂所で行われた補修以前の日記原本の写真がありまして、これを見ると一冊になっています。桐箱の中には、享和四（一八〇四）年に将軍家斉への上覧に供したときに作られたと思われる日記の写本も収められていますが、これは七冊となっていますので、はじめは七冊で、ある時期に一冊になったか、そのあたりは今後の検討課題と考えていいと思います。現在は東京大学史料編纂所での補修・表装を経て七冊となっています。

（二）

また、所蔵先である駒澤大学図書館の電子貴重書庫では、『家忠日記』の全頁の閲覧が可能となっておりますので、是非ご覧いただければと思います。

各巻の丁数と所収記事年次期間

一巻（遊紙二丁・本紙四七丁）　天正五（一五七七）年一〇月一四日
　　～天正七（一五七九）年九月五日
二巻（遊紙二丁・本紙五一丁）　天正七（一五七九）年九月六日
　　～天正九（一五八一）年一一月七日
三巻（遊紙二丁・本紙二六丁）　天正九（一五八一）年一一月八日
　　～天正一一（一五八三）年正月八日
四巻（遊紙二丁・本紙八〇丁）　天正一一（一五八三）年正月九日
　　～天正一四（一五八六）年八月五日
五巻（遊紙二丁・本紙八〇丁）　天正一四（一五八六）年八月六日
　　～天正一七（一五八九）年一二月一九日
六巻（遊紙二丁・本紙六一丁）　天正一七（一五八九）年一二月二〇日
　　～文禄元（一五九二）年七月六日
七巻（遊紙二丁・本紙七一丁）　文禄元（一五九二）年七月七日
　　～文禄三（一五九四）年九月（～未詳）

二、松平家忠という人物

『戦国人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇六年）の記述を参照しますと、家忠は弘治元（一五五五）年に生まれて慶長五（一六〇〇）年に亡くなる、享年は四六です。天正三（一五七五）年の長篠の戦いに家忠は出陣していますが、鳶巣山の戦いで父親の伊忠が亡くなったことで家督を相続し、家康のもとで、あるいはその間に徳川四天王の一人酒井忠次のもとに付属して家康とともに戦場に臨みます。それとともに家忠で有名なことは城普請に従事したことがあげられ、その技術に長けていたの

ではないかといわれています。たしかに『家忠日記』を見ると、城普請に従事しています。ちょうど深溝松平の支配領域には沼や川が多く、『家忠日記』にも出てきますが、洪水などの水害に遭いやすいところでした。そういったこともあって普請の技術を深溝松平家は体得していたのではないだろうか。家忠は関東に転封したときに忍城（埼玉県行田市）に入り、その後に上代（千葉県旭市）・小見川（同香取市）へと移りますが、あの辺りはご存じのように水郷地帯ですので、三河で鍛えられた普請の技術が関東でも役に立ったのではないか、あるいはそれが家康の狙いだったと考えられなくもないと思っています。伊能忠敬もあの辺りの出身で、名主を務めながら必要な土木技術を学んで、そして江戸に出て高橋至時に師事して測量を行っていますが、そういった地理的なものや生活環境が生んだ技術かもしれないと思っています。

松平家忠という人物は実は三人います。松平氏は十四松平・十六松平・十八松平などと呼ばれますが、地名をとって何々松平と呼ばれます。『家忠日記』の家忠は深溝松平、二人目は東条松平あるいは青野松平、三人目は形原松平です。三人とも同じ頃に活躍していますから、同じ家忠どうしが会っているということもあります。

とくに深溝松平家忠の「ちいは」という妹が、東条松平家忠（甚太郎）に嫁いでいます。この甚太郎は天正九（一五八一）年一一月一日に亡くなりますが、『家忠日記』の天正九年一一月一日に「東城（条）松平甚太郎死去候」。四日に「東条松（松平）甚太郎弔ニ越候」とありますので、早速家忠も葬儀に行っています。妹の夫ですから義理の弟になります。一四日「甚太郎死去付而、東条より妹引越候」ということで、妹ちいはが一〇日後には東条から実家に戻ってきます。そのちいはは、翌々年の天正一一年一二月八日に「殿様去四日ニ駿より御帰候、東条妹祝言之事申来候」とあり、殿様というのは家康で、家康が四日に駿河から浜松に帰ってきて、ちいはが再婚することが伝えられています。再婚先は武田旧臣の跡部氏の跡を継いだ跡部大炊助昌出で、そこへ再婚していくわけですが、これは家康の指示であったことがわかります。

そういう記事も日記には書いてありまして、普請とか戦だけではなく、日常の様々なことが書かれています。

三、深溝松平氏と徳川氏（松平宗家）・江戸時代

そもそも深溝松平は、十四松平・十六松平、十八松平とかいいますが、松平の惣家から分出して、初代の親氏から家康の祖父清康あたりまでの間に庶家を分出していきます。そのうちの一つなんですね。三代目の信光の子が五井（御油・愛知県蒲郡市）に分出し、その系統から深溝（愛知県幸田町）にも松平が分出してゆくことになります。深溝松平の世代は初代が忠景（忠定という説もあり）、二代好景、三代伊忠、四代家忠、五代忠利と続きます。実は好景から家忠まで、そして家忠三男の忠一も戦死しています。二代好景は永禄四（一五六一）年、三河の善明堤（愛知県西尾市）で戦死したと、深溝松平の家譜には記されています。ただし『家忠日記』天正六（一五七八）年三月四日に「祖父大炊助二十三年の心さし候」と出てきます。これを好景の二十三回忌と解釈すると、好景が亡くなった年は弘治二（一五五六）年まで遡ります。ただそのことは深溝松平の家譜には記されていないので、手掛かりは『家忠日記』になります。どちらを信用するかということなのですが、仮に弘治二年に好景が亡くなったのだとすると、この年には善明堤付近や上野城（愛知県豊田市）で今川氏と織田・吉良氏が戦っています。この頃家康は今川氏の庇護下にあり、深溝松平も今川方として戦っています。三河の吉良氏は今川と対立しており、吉良は信長と組んでいたので、信長と吉良共通の敵が今川ということになります。ですから家康のもとで家忠の祖父好景は織田軍と戦って戦死したことになります。そういう歴史がありますので、近世には家康が信長と戦ったということを記すのは憚られ、今川義元の亡くなった後の永禄四年の戦いにしたという解釈も成り立つのではないか。これは仮説ですが、今後の課題ということになります。

三代伊忠は三河の長篠（鳶巣山）で戦死します。それを継いだ家忠は、関ヶ原の直前の伏見城の籠城戦で、小早川秀秋・毛利輝元・石田三成らの大軍に囲まれて、七月から籠城して八月一日に亡くなります。京都の三十三間堂の向かい側に、淀殿

が父親の浅井長政の菩提を弔うために建てた養源院というお寺があります。そこの天井は「血天井」といって、伏見城で戦死した鳥居元忠たちの血痕が付いた床を天井に使ったものといわれています。

家忠の長男忠利は父親が戦死した後、関ヶ原に行こうとしますが、そのとき忠利のいた小見川の北には佐竹氏もいますから、そちらの守りを命ぜられました。その後大坂夏の陣のときに忠利の弟忠一は、この戦いが終わったら平和が来るので最後の奉公となるといって軍規を破って先陣を駆けて戦死してしまいます。この戦死が軍法違反だということで、忠一の戦死は評価されないことになります。ただ四代続いた戦死というのが深溝松平にとっては、徳川に対する大きな忠誠ということで、一つの家風として江戸時代を通じてあったと思います。

江戸時代の深溝松平氏につきましては、家忠は忍・上代・小見川、次の忠利（五代）は三河深溝に戻りますが、その後三河吉田（愛知県豊橋市）に移ります。次の忠房（六代）が三河刈谷（同刈谷市）・丹波福知山（京都府福知山市）、そして寛文九（一六六九）年に肥前島原（長崎県島原市）へと移り、島原藩初代藩主となります。

忠房は、広く貴重本を蒐集して現在の肥前島原松平文庫の原形を作った人物です。そして忠房と同じ家忠の孫の忠冬も、寛永元（一六二四）年から元禄一五（一七〇二）年にかけて、有名な『家忠日記増補追加』、あるいは二代将軍秀忠の事績録である『東武実録』なども編集しています。

その後藩主はしばらく島原で続きますが、忠祗（一〇代・島原藩五代）の寛延二（一七四九）年に下野宇都宮（栃木県宇都宮市）に行き、二五年くらいいますが、一揆が起こったり水害に遭ったり深溝松平は散々でした。次の忠恕（一一代・島原藩六代）のときに島原に戻ってきます。次の忠馮（一二代・島原藩七代）の時代に、一一代将軍家斉への『家忠日記』の上覧がありました。家斉からは「これは大事なので家宝として大切にしなさい」との言葉をいただき、その覚書きが『家忠日記』とともに伝えられています。

（四）

四、『家忠日記』に登場する人々

『家忠日記』に初めて家康が登場するのは、天正五（一五七七）年一〇月二二日です。「浜松普請候、家康馬伏塚より浜松御帰陣候」。馬伏塚（静岡県袋井市）というのは家康の高天神城（同掛川市）に対峙する城で、そこから浜松に帰ってきたわけです。その記事が現在残っている『家忠日記』の記事の中では最初となります。

『家忠日記』にどれくらいの人が登場するかというと、これも正確ではありませんが、だいたい七〇〇人くらいでしょうか。いろんな人が登場します。家康・信長・秀吉はもちろん、松平一族、家忠の家族、家康の家臣団、三河国衆、遠江衆、戦国大名では武田・北条・今川。今川は滅んでいますが氏真が生きています。『家忠日記』には氏真と思われる人物の似顔絵が描かれています。それから織田一族、文化人としての連歌師、僧侶、さまざまな芸能民など。ただ農民はほとんど登場しません。「何々の者」というように出てきますが、それが農民かどうかわかりません。農民がほとんど登場しないのが『家忠日記』の特徴の一つでもあります。農民との関係を家忠は積極的に持とうとしなかったのか、あるいは日常のことだからメモする必要がないと考えたのか、その辺りはわかりませんが、こういったことも今後の研究課題だと思います。

五、『家忠日記』の内容

肝心な『家忠日記』の内容ですが、家忠の日常と非日常ということですね。一番大事なのは家康の動向です。家康がどこにいるか、どのようなことを行ったか、その行動を家忠はチェックするんですね。深溝松平氏の家忠は、家康の一門であり、家臣ですから、やはり主人家康の動向がまず第一であると。ですから家康の登場は多いです。

それから日々の生活です。家族・親類・松平家臣（上司・同僚）・文化人・宗教

者といった人たちとの交流。日常生活の様々な内容の中には年中行事、日待信仰や雨乞いなども出てきます。文化・芸能では、連歌を能くし古典を嗜み、幸若舞・能・猿楽の鑑賞、それに加えて茶の湯など、機会ごとに季節ごとに非常に豊かです。

それとともに『家忠日記』で目立つのは贈答と持て成しです。『家忠日記』で「越候」とよく出てきます。人が来る場合には普通は「被越候」と使いますが、『家忠日記』では相手が来るときも、こちらから行くときも「越候」と書かれます。ですから文章を読んで判断しなければいけませんが、とにかく家忠もいろんな人の所に呼ばれて御馳走になったり、向こうからやって来るのを家忠が持て成しています。それから贈答です。上は家康から物をもらったり、あるいは上司の酒井忠次にプレゼントしたり、身内に贈り物をしたり、他の同僚に贈り物をしたり、もらったりなど、こうした記事が非常に多いです。

贈答と持て成しというと、今はあまり良いイメージがないですよね。贈答はお断りします。あまり持て成しはしないでくださいなどと。来年のオリンピックの「おもてなし」というのはありますが、やはり贈答と持て成しというのが社会での、人々との関係をつなぐ非常に大きなキーワードであったわけです。今でもそうですけれども、あまり出過ぎるといけない、バランスということでしょうね。贈答と持て成しのあり方を『家忠日記』の世界から読み取ることができると思います。

それから菩提寺である本光寺とのつながりです。本光寺は深溝にあって、家康が関東に転封したときに家忠も忍に行きますが、そのときに本光寺を忍に移すわけです。今は忍にはないのですが、『家忠日記』には忍にいる間に本光寺が出てきますので、行田にも本光寺があったと考えていいと思います。おそらく上代や小見川にも本光寺はあったでしょうし、深溝松平はそれから福知山、島原、宇都宮そしてまた島原と移りますが、島原にも本光寺はあります。家忠は本光寺と熱心にいろいろな関係を持ちます。先祖の供養、住職からの話を聞く、坐禅をする。そういうことが書かれています。

それから川狩り、鷹狩りなどの狩猟をしています。深溝松平の所領は池や川も多いですから、そこで魚を獲ります。鯉は何本と数え、鮒は何枚と数えるというのも、『家忠日記』から私も習いました。

非日常生活でいえば、やはり戦国の世ということで軍事行動です。出陣・普請・城攻め・刈田働き（収穫前に稲を刈ってしまうこと）などの行為を『家忠日記』から読み取ることができます。それから護衛です。例えば秀吉の妹の旭姫が、大坂から家康のもとに嫁いで来たときには、家忠は旭姫を迎えに行っています。また秀吉の母の大政所が、秀吉が家康を呼びつけて、その代わりに大政所を岡崎に遣わすわけですが、そのときに家忠は迎えに行ったりしています。家忠は旭姫や大政所の顔を見ているということですね。家忠はこういった様々な出来事を実に淡々と簡潔に書き記しているわけです。

六、家忠と本光寺

『家忠日記』には「会下」（えげ・えか）という言葉が出てきます。この場合は本光寺でいいと思いますが、家忠は本光寺へ足繁く訪れています。先ほど言いましたように、修門の場であり、寺では先祖供養や施餓鬼なども行われ、亡くなった家族や戦死した被官たちを弔ったりしていることがわかります。日記の最後の方、文禄元（一五九二）年ですから、家忠は上代にいますが、そこにあった本光寺に家忠が出かけたときに、「法門候」「法門聞ニ越候」といった文言があります。おそらく住職の説法を聞きに行ったものと思われます。これも精神修養でしょうね。また「僧たゝかれ候」とありますが、これは僧がたたかれているのを見ていた、というのではなく、僧からたたかれたと解釈すべきですね。本光寺はご存じのとおり曹洞禅宗ですから、坐禅を組んで修養を重ねているということが言えるわけです。

七、さまざまな情報入手

『家忠日記』は内容が豊かということに関わって、家忠は実に様々な情報を入手しています。上は家康から、岡崎・浜松・駿府・江戸という所から情報が入ってき

ます。上司としての酒井忠次、同僚の家康の家臣、竹谷松平・水野氏・鵜殿氏などの一族からも情報が入ってきます。それから自身の体験。それぞれが簡潔に書かれています。先程申し上げましたように、特に家康と関わる政治情勢は積極的に入手して記載していると思います。

ただ『家忠日記』を読んでいて、天正七（一五七九）年の信康事件（家康嫡男の信康が自刃した事件）については、記事がほとんどありません。信康が切腹したことについても書いてありません。信康は謀反を疑われたりなどの行動があるわけですが、その間には家康の正室築山殿（信康実母）から家忠に手紙が来たり、信康も家忠を訪ねて来たりということで、家忠も微妙な立場というか、これは家忠だけではないのでしょうが、日記に書いてあるから家忠ということですけれども、他の家臣の所にも信康や築山殿は手紙を出している可能性はありますが、いずれにしろ家康と息子の信康の問題については、家忠はほとんど記事を書いていません。忘備のための日記ではあるとは思いますが、そういう所は書かないという考えがあったのではないかと思います。

八、『家忠日記』を読む―日記の持つ連続性―

『家忠日記』の持つ連続性ということで、天正一八（一五九〇）年の小田原攻めの記事を紹介します。秀吉は惣無事に違反したということで、北条氏の討伐を行うわけですが、『家忠日記』を見ると、天正一八年一月二一日に「吉田（愛知県豊橋市）より来朔日ニ東筋出陣へ之由申来候」とありますから、この頃家康に関東出陣の命令が下り、家忠も家康について東海道を下ることになります。二月二五日に家康はすでに沼津に着いて秀吉を待ちます。家忠も待つわけですが、三月二七日に「関白様沼津迄御成候」とあり秀吉は沼津に到着します。そして二九日には「山中筋をしこませられ候、山中城中納言（羽柴秀次）殿衆のりくつし候」とあり、三島（静岡県）の山中城が落ちています。また『家忠日記』には出てきませんが、四月五日には秀吉は箱根の早雲寺に陣を取ります。

（十八）

『家忠日記』にはその前日の四月四日に「城ちかく陣取候」とあり、四月七日から五月のはじめまで「同普請候」と、家忠は連続して普請に従事しています。これは家康の陣場、つまり陣城を造っています。小田原市内の寿町、酒匂川の右岸ですが、家康が陣を取った今井陣場という所があります。柳川家の屋敷があり東照宮も建てられていますが、そこに東西約一七〇メートル、南北約二二〇メートルの土塁と塀で囲んだ陣地を構築します。それに家忠も関わっているわけです。

六月になると二四日に「八王子の城責崩候由御注進候」と、八王子の城が落ちたということが注進としてもたらされたとあります。二六日に「関白様石かけの御城へ御うつり候」と、秀吉が「石かけ」（＝石垣山）の城に移っています。そして七月五日「小口番ニ越候、氏直内府（家康）様内衆羽柴下総（滝川雄利）陣所ニ走入被成候而、関白様へ御侘言候」とありますから、氏直が城から出て秀吉の所に謝罪に行ったということです。そして次の六日に「城中へ関白様小性衆弐人、此方ニ而ハ榊原式部大輔（康政）城うけとりにこされ候」、七日に「城中関東衆皆々御出し候」、これで北条側の城を守っている人たちが小田原城から出てきた。八日・九日には「地下人出候」とありますから、一般の人たちも城にこもっていたことがわかります。一〇日に「殿様（家康）城へ御うつり候、城中見物ニこし候」、一一日に「氏政、同弟奥州（北条氏照）ニ腹を御きらせ候」、一二日には「氏直ハ高野へつかハされ候ハん由候、荷馬あたり候、本田作左衛門尉（本多忠勝）所へ越候」、一三日には「関白様城中へ御成候」と秀吉は小田原城に入っています、そして一六日には「江戸表へ立候」とありまして、家康は江戸に向かっています。すでに秀吉から関東への転封を命じられて、様子を見に行ったということがわかります。一枚の文書だとつながらないのですが、日記は連続していますので、日記の流れにそって一つ一つの文書史料を当てはめていくと、非常に動的に歴史というものが理解できる。そういうようなことを『家忠日記』を使って、様々な研究をさらに進めていくことが大事かと思います。

家康はその後関東に移ってきます。日記として一八年間連続して書かれていますので、『家忠日記』というのは戦国から近世へ向かう社会の様子が、家康の動向と

ともに知ることができるということで、史料的価値が非常に高いといえます。

九、『家忠日記』にみる家康と忠次と家忠

次にご紹介するのは酒井忠次です。忠次は本多忠勝・榊原康政・井伊直政とともにいわゆる徳川四天王の一人で、その筆頭です。『家忠日記』には家康の記事も多いのですが、忠次の記事も七四回と多い。何故かといいますと、家康家臣の筆頭ということもありますが、東三河の国衆を統括しているからです。つまり家忠の上司が酒井忠次で、その上に家康がいるわけです。家康の命令が酒井に来て、酒井が三河の他の松平氏なども含めて、三河の国衆に対して命令する。日記には命令が来ると「申来候」と記されています。それに従って、家忠は動いていきます。ですから家忠にとって、家康の動向も大事ですが、その次に大事なのは上司である酒井忠次となります。「酒左（酒井左衛門尉忠次）より申来候」というように、忠次から家忠・他の三河国衆への指示・命令が伝わるということです。

もちろん家康からの命令が直接来ることもあります。家康からと、家康の命を受けた忠次からの指示、これによって動いています。特に多いのが軍事行動です。戦国大名の家臣としては当然の公的な関係です。ですから大名家康―旗頭忠次―衆頭の家忠というように、忠次の任務は国衆に指示をすることであり、その指示を受けて家忠は動いていく。『家忠日記』を読んでいる中で、徳川氏の軍事編成というものが貫徹していることがわかります。非常に細かい指示が出ています。

さまざまな付き合いということも、先ほど申し上げましたが、忠次と家忠の関係というのは、旗頭から衆頭へといった軍事的な関係、公的な関係だけではありません。例えば忠次から能に呼ばれたり、日待ち・月待ちの信仰に呼ばれて一つの部屋に忠次と家忠が一晩過ごすこともあったでしょう。それから家忠が忠次の小姓衆を振る舞ったりする。あるいは忠次から菟をもらう。忠次の指示を受けた者から弓法を習ったりする。忠次の子息家次が結婚すると祝言に駆け付ける。家次から家忠は鷹をもらい、そのお礼に出かけて行く。忠次は家忠の上司ですが、これらは軍事編成を超えた、日常生活においても親密な交流・関係を持っているわけです。封建的な主従関係という公的な関係ではなくて、私的な関係ですが、公的な関係を私的な関係が補強していく。戦国大名の権力構造といいますと、寄親寄子制とか、知行を安堵されて軍役を務めるというような公的な関係で説明されますが、それだけではなくて、日常の細かな付き合い、つまり私的な日常関係が公的な関係、ここでは封建的主従制をいいますが、それを補強していくということがいえます。そうした戦国大名の権力構造の一面を日記の中から読み取ることができるのではないかと、日記を読んでいてそんな感想を持ちました。

先ほど酒井忠次がいわゆる四天王と申し上げましたように、この時代に四天王といわれていたわけではありません。しかし、これに関連して興味深い記事を見かけましたのでご紹介します。天正一四（一五八六）年四月です。秀吉は家康を京都・大坂にやって来させて、自分に対して臣下の礼をとらせたいと思っています。家康はじらしてなかなか出かけて行かない。それで秀吉は自分の妹旭を離婚させて家康に嫁がせます。それでも家康は上洛しないので、大政所を岡崎へ差し向けます。これで家康はやっと秀吉のもとに挨拶に行きます。大河ドラマで秀吉が家康の手を取るシーンがありますが、この記事は『家忠日記』にありまして、ドラマのこのシーンはおそらくこれに基づいていると思います。

『家忠日記』には、旭姫が嫁ぐ前の天正一四年四月一九日にこう記されています。「又よしたへ御祝言之儀聞合ニ人をつかハし候、廿八日之御祝言少相延候由申来候、延候いはれハ、御初いれに天野三郎兵衛を御つかハし候、秀吉無御存知仁にて候由にて、腹立にて候由候、酒井左衛門尉歟、其外本田平八郎、榊原小平太か越候ハぬとの儀にて候、其分申候て、上より小栗大六、尾州よりひちかた彦三郎被越候由候」。家康と旭姫の婚儀のことについて、最初に旭姫を迎えに行ったのが天野三郎景能だったのですが、秀吉は天野のことは知らないと腹を立て、酒井忠次かそのほかでは本多忠勝か榊原康政が来ないのはなぜか、ということになり、それを伝えに上方から小栗大六（重常・家康家臣）・尾州から土方彦三郎（雄久・織田信雄家臣）がやってきたとあります。本文の上の余白に記された頭書には、「殿様ハいろ〳〵六ヶ敷

（七）

儀申候間、事切候ハんかと御意候、さやう候へハ、信雄様失御面目候とひちかた彦三郎申候て、本田平八郎殿廿三日ニ御上候由候」。殿様（家康）は（秀吉が）いろいろと難しいことを言ってくるので、事切（破棄）にしようかと思っているけれども、そうなるとこの婚儀を斡旋した織田信雄が面目を失ってしまう、ということを土方が言っているので、そこで本多平八郎忠勝が二三日に行くとのことだ、と書かれてあります。この中に出てくるのは酒井忠次と本多忠勝・榊原康政ということで、秀吉が家康の家臣の中で評価しているのは天野ではなく、酒井・本多・榊原の三人ということになります。四天王にはあと一人井伊直政がいますが、この頃直政も頭角を現しはじめています。このあと大政所が岡崎にやってきたときに警備するのは井伊直政です。また直政は大政所が帰るときには大坂まで送って行きます。秀吉はこれを喜んで、これが契機かどうかはわかりませんが、秀吉は直政をたいへん評価するようになります。ですからこの頃は秀吉にとって、いわゆる徳川四天王というのがはっきりと認識の中に出てくる時期で、おそらく家忠を含め家康家臣たちは三人を評価しており、そうした雰囲気もあって家忠は書き留めているのではないかと思います。

一〇、佐久間真蔵維戢と『家忠日記』

『家忠日記』というのは、島原藩松平家の中でも珍重された史料であり、それが故に将軍への上覧になったわけですけれども、実際に藩の中で『家忠日記』を研究した人がいました。これはかつて新行紀一先生が深溝本光寺の調査報告書の中でも紹介されていますが、佐久間真蔵維戢という人物で七〇石取りの藩士です。父は喜一郎維信、祖父維草は島原藩主六代忠恕・七代忠馮に仕えた漢学者です。維戢は定府詰めだったときがありますが、その帰りがけに深溝に寄っていろいろと調べて書を編みます。これが『深溝誌』と呼ばれる書です。『深溝誌』は二冊ありまして、一冊は肥前島原松平文庫に、もう一冊は愛知県西尾市の岩瀬文庫にあります。新行先生によりますと、この二冊は同筆で、島原の『深溝誌』は手元に置いておくもので、もう一つは本光寺の方に贈ったものと理解されています。『深溝誌』は別名『萩廼古枝』といいます。

佐久間維戢は文久二（一八六二）年に『深溝誌』を書き、明治九（一八七六）年には邨岡笠城と称して、『慈雲院殿家忠公　御日記参考稿本　壱』に『家忠日記』の序文を記しています。『慈雲院殿家忠公　御日記参考稿本　壱』が肥前島原松平文庫、『同弐』が島原本光寺に所蔵されています。維戢は『家忠日記』をどのように考えていたかということが、『御日記参考稿本　壱』の解説に記されています。これもこれからの研究課題なのですが、『御日記参考稿本』というのは文久二年に作られています。ところが幕末の混乱期になくなったようで、それを発見して維戢も嬉しいといっていますが、新たに明治九年に序文と解説を加えて、今日の『御日記参考稿本』の壱と弐ができたと考えられます。当時の人たちが『家忠日記』をどのように考えてきたかということですが、維戢の解説には次のようにあります。

家忠日記原本蓋前後ヲ亡逸スルモノ也、其ノ大サ約竪四寸五分許、横六寸五分許、上下長短錯雑シ、幅員斉頓スルナシ、且料紙一定セス、往々反故帋背或懐紙詠草ノとくに背又往復書簡ノ餘白等裁取編集スル物ナリ、按ルニ此編、公自己日用遺忘ニ備フル而已、其質樸、古雅感賞ニ堪ズ、且往々紀行ヲ挾入シ、又自画ノ花鳥山水アリ、連ノ発句アリ、華押ヲ無数認ムルアリ、或商客ニ佩刀製造ノ註問并作価ヲ記ス、然リト雖、自己備忘ノミナラス、創業時勢細述スルアリ、豊公朝鮮ノ役事ノ如キ、最詳悉セリ、但、東照宮ヲ指シテ、始ハ家康或ハ家康殿トシ、中間ニ至テ殿様或上様トス、始ニ上様公方様ト記スルハ織田信長ヲ指ス也、時勢ノ沿革ニ因テ呼称ノ変化スルヲ見ルヘキ也、

丙子（明治九年）五月又十四日　於阪本街寓舎　笠城老人又識

この維戢の理解は、今日の私たちの理解と同じようなものですが、ただ料紙が反故の紙を使った、あるいは懐紙、詠草、とくに往復書簡の余白を使ったということについては、原本の調査をして確認していく必要があると思います。また「上様」というのは、後に家康のことを指すようになるけれども、最初は信長のことだといっています。しかし家康は『家忠日記』の中では上様と呼ばれていないので、この理

解は違うと思います。いずれにしろ佐久間維戢は、この稿本を書いて丹念に註釈を付けています。現在稿本は天正五年から六年のものが一冊、天正七年のものが一冊ありまして、その後のものが確認できませんので、その続きが本光寺や肥前島原松平文庫にあれば面白いですし、今後稿本の壱・弐と本文を比べたり、解説を見ることで、『家忠日記』の理解がいっそう深まるのでないかと思っています。

解説の一例を紹介いたしますと、天正七年の書き出しに「天正七年己卯正月大」、その下に「生年廿五歳」「竹ニしねんこつく」とあります。維戢の稿本には「竹ニしねんつく」とあります。「しねんこ」は「じねんご」といいまして、維戢は「ジねントハ竹林ニ生シテ竹ヲ害スル虫ノ名ナリ、今シねンゴト称ス、是ハ気候不順ノ兆ナレハ年首ニ年柄ノ不宜事ヲ記セラル、ト見ユ」と註釈しています。日記原本の天正六・七・八年にはこの「じねんご」のことが年の書き出しに書いてあります。家忠は単に虫が付いたということにとどまらず、領内の飢饉や豊作を思いながら、年頭の記事に付け加えているのだと維戢は理解しているわけです。

今、私たちは深溝を「ふこうず」といいますが、家忠は日記に「ふかうそ」と書いています。また同時代の文書にも「ふかうそ」とあります。この点について維戢は気付いています。肥前島原松平文庫の『深溝誌』、すなわち維戢が手元に置いていた方には、朱の頭注書で「源□（慶）公、ふかうそと書給へるニ習ひて、そと書き候、ふかミそなれ□（ハカ）、そをう（すカ）ニ転する事ハ多例候半、今、ずと呼ハ通音にて訛したるニ御座あるへし、づといふハ、弥あやまり也、昔ハ必、ふかうそと申候半」と記しています。これは、「『そ』が『す』に転ずることは多くあるが、『ず』であり『づ』ではない。昔は必ず『ふかうそ』といっていたが、今は訛って『ふかうす』といっている」ということです。こういうことまで維戢は細かく注意を払って書いています。これから『家忠日記』を研究する際には、江戸時代の先人の研究にも注目する必要があると思います。私たちも今、『家忠日記』の翻刻を出版することで準備を進めていますが、そこでは「ふかうそ」としています。

むすびに

以上、結論めいたものはありませんが、駆け足でさまざまな話をさせていただきました。なお最近、愛知県の中川三平さんが『現代語訳　家忠日記』（ＫＴＣ中央出版、二〇一九年）という本を出されました。私はそこからも学ばせていただいていますが、皆様方もこれを機に、是非『家忠日記』に親しんでいただき、生き生きとした戦国の社会を読み込んでいただければと思います。企画展の会期は一一月一三日まで、まだ一か月ありますので、何度もご覧いただいて、私も会期中はなるべく足を運びますので、いろいろなことを教えていただきたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

（くぼた　まさき　駒澤大学文学部教授〈当時〉・現名誉教授）

（編集部謝辞）本稿は令和元年一〇月一一日、第三九回禅文化歴史博物館セミナー（於駒澤大学中央講堂）として行われた御講演をもとに、講演者が加筆修正を加えたものを収録しました。久保田先生には、企画展の準備段階から企画・監修をお引き受けいただき、多くの御指導・御助言を賜りました。また図録の製作に当たっては、執筆を協力していただいた大学院ゼミ生の御指導とともに、御本人自ら御寄稿を賜るなど、献身的な御支援に対しまして、改めて深謝申し上げます。